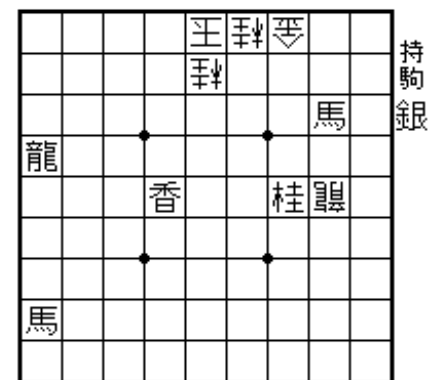


## 解説の部

### 第1番



- ▲62銀 △42玉 ▲43桂成△同玉 ▲63香生△42玉  
▲51銀生△同玉 ▲33馬 △同桂 ▲91龍 △42玉  
▲31龍 △同玉 ▲32金迄15手。

まずはシンプルな構想もの。香で開き王手するわけだが、生で行かないと12手目に合駒されて逃れる仕組み。右辺逃亡の押さえ駒である23馬を捨てる手が入って纏めはうまくいった方かと思う。

白石連太郎「成って詰まないものが、不成で詰むかと思い、盲点にはまって散々悩んだ」

岩田茂「ほぼ原型のまま65の香を63に動かすカラクリが妙」

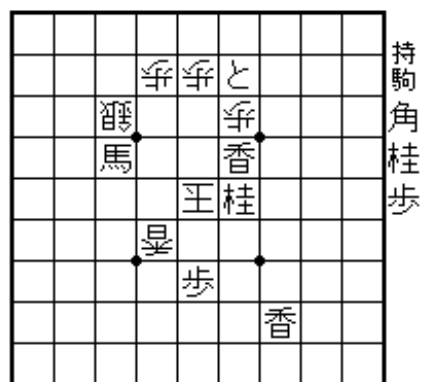
原亜津夫「まとまりのよさでは一番と思う」

やさしすぎたせいもあり、A級順位戦で降級。がっかりする反面、なぜかほっとしている部分もある。私にとってはそれなりに重圧だったようだ。

ちなみに94龍・98馬の配置は絶対で、1路でも近づけると余詰がある。…とパソコンに言われた。(苦笑)

(詰将棋パラダイス H16・6)

第2番



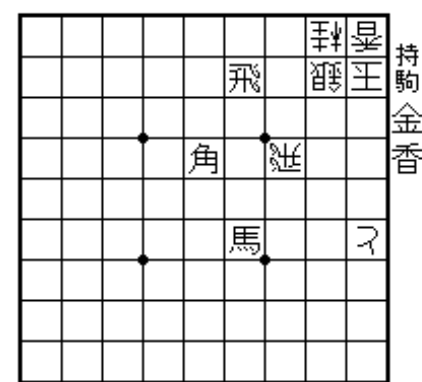
- ▲47桂 △54玉 ▲53桂成△同歩 ▲76角 △65飛
- ▲同角 △45玉 ▲54角 △同玉 ▲56飛 △45玉
- ▲46歩 △44玉 ▲45歩 △同玉 ▲46飛 △同玉
- ▲56馬迄19手。

パラ平成9年11月に発表した作品を作成する過程で拾った素材を別の作品に仕上げたもの。打歩詰誘致のための飛合はまだまだいいものができるような気がする。

44香は作意成立のための重要なキーとなっているが、その顔を立てるために入れた3手目のせいで、盤面を中央にもってこざるを得なかった。この手を削って左の図にすることも考えたが、一長一短で微妙なところ。今回はあえて直さずに収録することとした。

(近代将棋 H12・7)

第3番



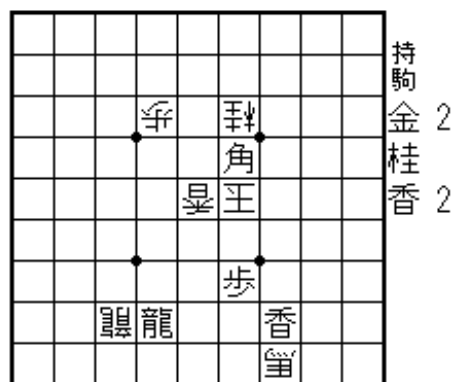
- ▲23金 △同玉 ▲32角成△同飛 ▲25香 △12玉
- ▲45馬 △13玉 ▲35馬 △12玉 ▲34馬 △13玉
- ▲24馬 △12玉 ▲23馬 △同銀 ▲32飛成△同銀
- ▲22飛 △13玉 ▲24飛成△12玉 ▲22龍迄23手。

今年に入って、ブログを開設して詰将棋関係のことを書きなぐっている。誰でも見れるし、コメントなどもいただけるわけだが、基本的には日記なわけだから、好き勝手なことを書ける。こういった位置付けのファジーさが気に入っている。(自分のいい加減さにマッチしているんですね、きっと)

そういう位置づけに便乗して、「入選するほどではないけど、捨てるのも惜しいなあ、という作品の発表もしちゃおうか」ということでいくつか未発表のものを載せており、これもそのひとつ。端正な実戦型から馬鋸が出てくる意外性だけの作品。もう少し逆算することもできるが、形を崩してまで入れる価値のある序は結局見つからなかった。これはこれでいいんだろうな、と思っている。

(冬眠日記 H17・4)

第4番



- ▲46歩 △56玉 ▲47金 △同玉 ▲59桂 △同香成
- ▲49香 △48馬※▲37金 △56玉 ▲57香 △同馬
- ▲47金 △同馬 ▲66龍迄15手。

※8手目同成香は37金～58香で早い。

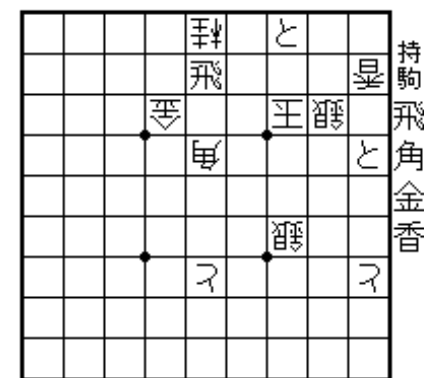
初手46香が自然だが56に逃げ込まれると手が続かない。46歩は47を空けておく意味合いを含んでいる。47金と誘ってから59桂～49香と畳み掛けるのに対し、渋く馬を移動合させる応酬が主眼。

熊野古道「歩突きの軽妙な出だしから焦点の香打に対し度肝を抜く馬合、さらに一旦打った金を捨てての収束と、憎らしい程計算し尽された構成」  
今川健一「48馬の移動合が主題だが、前後の味付けも旨く決まった」

自分のコメントとして「収束大駒を消せなかったのは残念」と書いてある。7人も誤解させといて、いやなヤツだな～。(笑)

(詰将棋パラダイス H12・6)

第5番



- ▲55角 △43玉 ▲44香 △34玉 ▲33飛 △同玉
- ▲22飛成△同玉 ▲43香生△31玉 ▲22金迄11手。

第1番と同じく香生がテーマ。こちらは比較的香生の基本形となっているものを逆算した。最初は怪しいと思っていたが、左にひとつ寄せてみたらとりあえず逆算の利く形になっていた。やってみるものである。

おむすび「誰が44香、なんて考えよう。それにダブル飛捨てとは。そして香生！息をつく暇もない。」

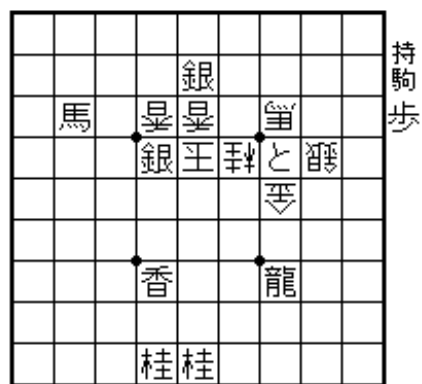
西村誠一「かの有名な3手詰からの逆算。主役の角・香を限定打で登場させる導入部など、思い描いたとおりの仕上げではないでしょうか」

中出慶一「難解な序盤、鮮やかな収束で言うことなし。中編を解いた気分」

苦肉の策であった序が意外に好評を集めて半期賞を受賞したが、検討しなおしたところ3手目42飛打～33角成で余詰んでおり、今回57とを追加配置して修正した。ちょっと残念。

(詰将棋パラダイス H10・9)

第6番



- ▲43銀生△同馬 ▲55銀 △45玉 ▲35と △同銀
- ▲56馬 △同桂 ▲46銀 △同銀 ▲57桂 △同銀生
- ▲35金 △54玉 ▲55歩 △同玉 ▲47桂 △54玉
- ▲45金 △同玉 ▲35龍 △54玉 ▲55龍迄23手。

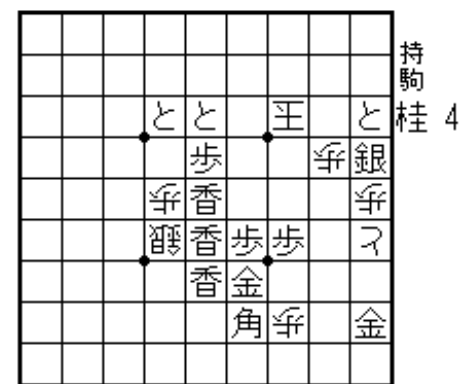
長年高校担当を勤められた阿部健治氏が担当を降りられるとのことで、近藤真一・水上仁・高坂研・三角淳の4氏で「送別会」を誌上で開催した。自分は「I」の字を担当。あぶり出しが苦手な私にしてはうまくできた方と思う。初手に伏線が入って満足のいく出来。

神田英明「馬捨ての大技と後は細かい芸が続いてIの字の完成でした」  
足利太郎「56馬の意味付けがわからず苦労した。力感あふれる序盤が強烈な印象を残す作品」

私にとって阿部健治氏は詰キスト同士の交流の楽しさを教えてくれた方であり、良い作品アドバイスを数え切れぬほどいただいた。今後ご活躍を期待する次第。

(詰将棋パラダイス H14・9)

第7番



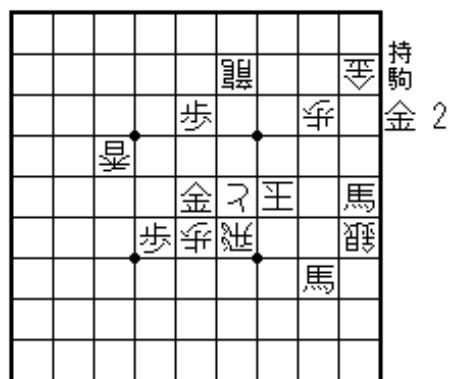
- ▲43と △同玉 ▲53歩成△34玉「▲23銀生△25玉
- ▲37桂 △26玉 ▲45桂 △25玉 ▲14銀生△34玉
- ▲33桂成△同玉◎」▲43と △同玉 ▲53香成△34玉
- 「◎」 ▲43成香△同玉 ▲53香成△34玉 「◎」
- ▲43成香△同玉 ▲53香成△34玉 「◎」
- ▲66角 △同歩 ▲23と △44玉 ▲45銀 △55玉
- ▲56金迄63手。

順次香成趣向はあまり傑作が出ていないようだが岡村孝雄・重棟勲氏の合作「ルート188」や護堂浩之氏作の「立川」などの隠れた名作が存在している。香が成る→捨てる→次の香が成るの“→”の部分にどのような手順が入るかがポイントとなりそうだ。

本作は銀による上下運動を絡ませて桂打～二段跳ねによって最初の→の部分を買う。戯作ではあるが指の運動としてはまあ気持ちいい方？

(冬眠日記 H17・5)

第8番



- ▲17馬 △①26飛▲同馬 △46玉 ▲47金 △同玉
- ▲37飛 △②46玉▲35馬 △同と ▲47飛 △同玉
- ▲48金 △36玉 ▲37金迄15手。

①他合（金は品切れ）は34金～16馬で早い。

②58玉は59金～77飛。

東京詰工房の作品集「KOBQ」に掲載されていた三谷郁夫氏の名作（②の変化が作意となっている）を見て飛打を入れる方向でアレンジを加えてみた。比較的その部分は容易であったが序奏付けには苦心惨憺。この収束を発見できたのでなんとかなった、というところ。

市村道生「37飛には参った。74番の配置が絶妙。傑作」

池田俊哉「17馬といい、47金から37飛といい、不利感たっぷりの手順」

梅本拓男「移動合は当然だけど37飛が全然見えなかった。まさに盲点、堂々の首位」

解説・柳原裕司「37飛に58玉なら59金、同玉、77飛、68玉、59馬までぴったりの詰め。数年前にこの手順を作意にした作品を見た記

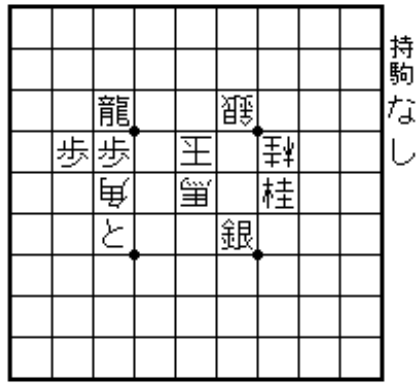
憶があるのだが、変化に隠したのが作者の工夫か。収束、35馬から打ったばかりの飛を捌いて鮮やかに仕上げる」「導入部だって負けていない。普通26飛のような移動捨合が入れば、それだけでも一局を支え得るものだが、27馬を一つ寄る初手はもっとすごい。しかも捨駒になっているのではないか。たとえば39馬を17へ捨てる場合と、どう違うか。初手の「極上の味」を確認してほしい」

柳原氏の解説が嬉しくて、何度も読み返した。また、その年の詰将棋大会で三谷氏とこの作品の話で盛り上がったのも記憶に新しい。

A級順位戦優勝作。

（詰将棋パラダイス H10・6）

第9番



- ▲43龍 △64玉 ▲73龍 △54玉 ▲43銀 △44玉
- ▲34銀成△54玉 ▲43龍 △64玉 ▲56桂 △同馬
- ▲73龍 △54玉 ▲44成銀△同玉 ▲43龍迄17手。

平成10年の年賀状用に作った初形曲詰の「10」の字。初形曲詰は制約条件の難しさからか、途中からまるで無筋の追回しになったり、舞台の外に玉が飛び出していってしまうものが多く、あぶり出しに比べると解きにくいことこの上ない。この作品はそういう意味では軽趣向の手順を展開し、舞台内でちょこまか動く玉を楽しんでもらえたのではないかと思います。…ま、これ以降は作れてないんですけどね(笑)。

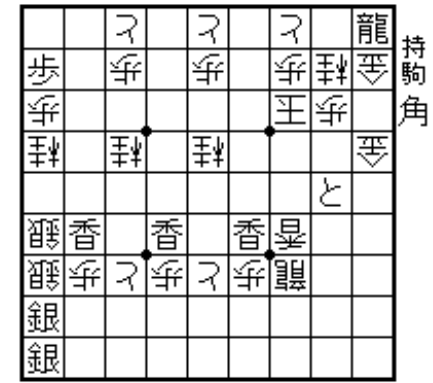
池田俊哉「今年の年賀詰か、と思うが知恵の輪風の味付けは面白い」

秋元節三「振り子のような龍の動きに10点をつける」

岡村孝雄「気が付いてみれば二往復半」

(詰将棋パラダイス H10・10)

第10番



「シーソーゲーム」

- ▲55角 △44角 ▲同角 △43玉 ▲53角成△同玉
- ▲75角 △64角 ▲同角 △63玉 ▲73角成△同玉
- ▲91角 △82角 ▲同角 △同と ▲55角 △64角
- ▲同角 △63玉 ▲53角成△同玉 ▲71角 △62角
- ▲同角 △同と ▲35角 △44角 ▲同角 △43玉
- ▲33角成△同玉 ▲51角 △42角 ▲同角 △同と
- ▲55角 △44角 ▲同角 △43玉 ▲53角成△同玉
- ▲75角 △64角 ▲同角 △63玉 ▲73角成△同玉
- ▲95角 △84角 ▲同角 △83玉 ▲93角成△同玉
- ▲75角 △84角 ▲同角 △83玉 ▲73角成△同玉
- ▲55角 △64角 ▲同角 △63玉 ▲53角成△同玉
- ▲35角 △44角 ▲同角 △43玉 ▲33角成△同玉
- ▲34歩 △同桂 ▲22角 △同金 ▲34と △同玉
- ▲14龍 △35玉 ▲15龍 △46玉 ▲45金 △56玉
- ▲55金 △66玉 ▲65金 △76玉 ▲75金 △86玉
- ▲97銀 △同玉 ▲89桂 △86玉 ▲97銀 △同銀

▲85金 △96玉 ▲95金 △86玉 ▲85龍迄101手。

当時は新潟勤務だったが、何度か業界の親睦将棋大会に参加させてもらった。この年は仙台に前日集合し、福岡まで。この作品は前日の仙台のホテルでなんとなく作り始めた。慣れない床で寝付けず、マグネット盤をいじくっている内、「お、もしかしてできるかな」。気が付けば朝になっていた。まあいいやどうせ移動日だし。ところが福岡でもやはりどうしても考え込んでしまう。詰キストの悲しい性である。

なんとか完成させ、初めての百手超え、勇躍投稿したがなんと7手の余詰を見逃してガッカリ。あまりの落胆に今回のための修正まで放っておいたくらいである。

今見てみると何をどこでそんなに徹夜するほど考えなければいけなかったのか全くわからない。キーとなる93歩ハガシのところと収束だったのだろう。ちなみに今回はこれ以上ない位アッサリした収束に変えたが、発表時はそれなりに頑張ったものを付けていた…ような記憶がある。

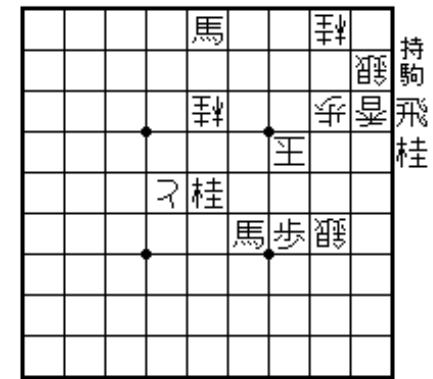
ありふれた角打角合趣向だが、2往復させる意味づけは単純ながらよくできているかと思う。収束まで通してB級趣向らしさが存分に出ているところが現在の私好みである。今回の修正にあたっては形の方もなるべくB級っぽく仕上げるように留意した。初形も詰上がりもなかなか笑える形になっているので確認してほしい。

ブログ上で堂々と発表（ここまでB級作であっても恥ずかしくない、っていうのもブログのいいところだと思う）。たくぼんさんから「まさに手順を楽しむといった趣きで素晴らしい作品」というコメントをいただき、とても嬉しかった。

え、将棋大会はどうだったんだって？実は優勝したんですよこのとき。県代表クラスもいるのにビックリしました。しかもこの作品のせいでほとんど寝てないんですけどねえ（笑）

（近代将棋 H10・7）

第11番



▲35歩 △同銀 ▲26桂 △同銀 ▲33飛 △25玉  
▲52馬 △15玉 ▲24馬 △同歩 ▲13飛成△同銀  
▲16香迄13手。

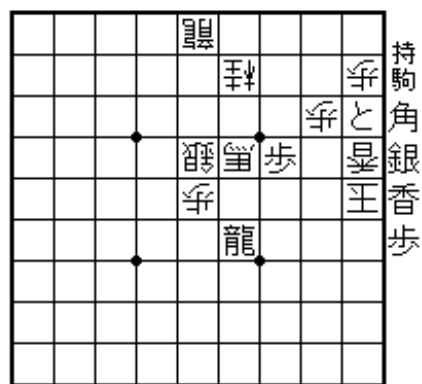
多くの詰将棋作家は「素材がないときに創作をしてみるときの形」というものがあるはず。私の場合、「飛を切って香打迄」はひとつの形となっている。多分これは昔将棋世界の表紙に載った桑原辰雄氏の名作の影響を受けているものと思われる。

本作はたいぶ前に発表した作品のアレンジ。邪魔駒除去からの限定打が主眼となっている。特に邪魔駒除去の方は上部脱出の変化を伴うのでかなり見えにくい部類に入るのではと思う。

今回全体の構図が気に入らなくて配置を微修正している。8手目と10手目に変同があり、痛い所ではあるのだろうが、作者的にはなぜかほとんど気にしていない。作意順の逃げ方が最も自然だからかもしれない。

（将棋世界 H10・8）

第12番



- ▲33角 △①25玉▲29香 △②26馬▲15角成△同香
- ▲14銀 △34玉 ▲35歩 △同馬 ▲23銀生△33玉
- ▲34歩 △同馬 ▲同銀 △同玉 ▲25角 △33玉
- ▲43角成△同銀 ▲23と △34玉 ▲24と迄23手。

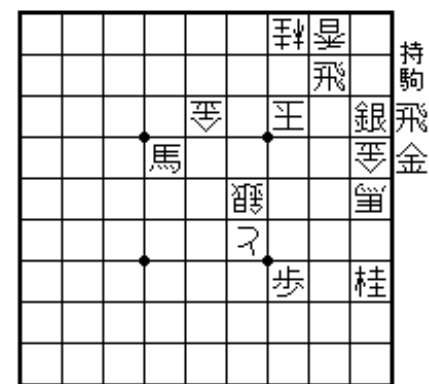
①同馬は17香、16歩、35龍。

②26香合は36銀～27銀～26龍。28銀合は16銀、同香、28香。

飛と香の焦点に捨合するのも好んで作るパターンのひとつ。第4番と比べてみるのもまた一興。29香は限定で28香では26桂で逃れる。初手に打った角を捨合されたタイミングで成り捨てる感触はお気に入り。後片付けがやや苦しく、齊藤吉雄氏に「直しなさい！」と命令されたが、頭5手を欲張りすぎて自由が利かなかった。私なりに精一杯の捌きだと思う。池田俊哉「意味づけを変化に隠した限定香打ちから馬移動合を翻弄する手順、とさずがさずがの構成」  
 薔薇澤修司「29香が見えずが苦しむ。28銀の応手にちょっと苦しむ。15角成が見えずもがき苦しむ」

(詰将棋パラダイス H11・9)

第13番



- ▲25桂 △同金 ▲24銀 △①同馬 ▲32飛打△43玉
- ▲44金 △同金 ▲53馬 △同玉 ▲62飛成△43玉
- ▲32飛成△54玉 ▲52龍右迄15手。

①22玉は55馬、44桂、12飛、同玉、45馬以下早い。

おそらく今回の25作品の中では最も難解ではないかと思う。

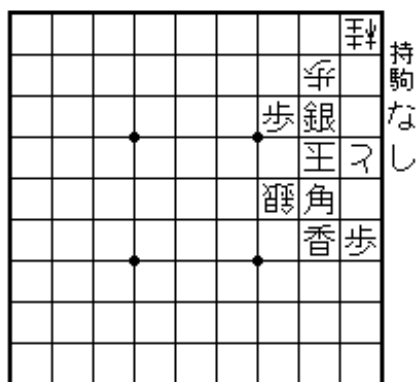
主眼は取れる金を逃がしておいて53馬と捨てる部分であるが、その手順を見つけるためには24銀の変化伏線を入れる必要があり、さらにその24銀を入れるために25桂の変化伏線が必要となる、という多重構成になっていてこれこそが作者の設定したテーマである。

以前私も難解派と呼ばれていた時期があったが、自分では一度もそういう風にしたことはない(いや一度くらいはあるかも)。たとえ難しい部分があったとしてもそこには必ず有機的な狙いがあるはず。詰将棋のミステリ的な要素を大事にしていると感じていただければな、と思う。

(詰将棋パラダイス H15・6)



第14番



- ▲43角成△25と ▲34馬 △13玉 ▲12銀成△14玉
- ▲15歩 △同と ▲13成銀△同玉 ▲35馬 △24桂
- ▲同馬 △12玉 ▲13銀 △21玉 ▲22銀成△同玉
- ▲34桂 △12玉 ▲13歩 △21玉 ▲32歩成△同玉
- ▲42馬迄25手。

打って変わって易しい捌き主体の作品。全国大会握り詰入賞作。

(解説 ☆石黒太平楽 ★筒井広末)

☆流石の市島さんも握り詰ではこのくらいでしょうか。しかし、移動合に捨合と内容は豊富で、流石です。他と比べると、大会という席での評価は損をするのは仕方ないでしょう。

★最近の握り詰のトレンドは初形曲詰に傾いているように感じる中で、その流れに逆らうかのような(本人にはその気はないかもしれないが…)手順勝負の作品で清々しさすら感じます。

☆紛れは特にないですし、変化も簡単です。市島啓樹の作品が解けるのですから、ありがたいことです。

★全国大会の翌日の麻雀大会で5巡目くらいに四暗刻を自摸られました。ひどい人だと感じました。

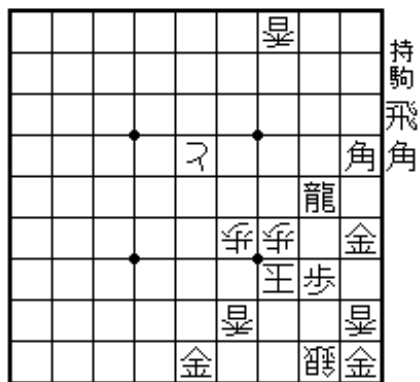
面白かったので全文掲載。「握り詰ではこのくらい」とか「流れに逆らう」とか書かれているが、そもそも握り詰にチャレンジして成功したのはこれが初めて(笑)。たまたま纏まったので出品しただけなのである。

握り詰というと高坂研氏はいつも神業のような作品を見せてくれている。どうしたらあそこまで完璧に出来るものなのか、頭を割って中身見てみたいものだ。虹色の脳細胞とか見れそう(笑)。

そういえば5巡目四暗刻あったなあ。いや楽しかった(笑)。

(詰将棋パラダイス H11・9)

第15番



▲①97飛△238玉▲36龍 △同香 ▲39歩 △同玉  
▲17角 △28歩 ▲同角 △38玉 ▲37飛 △同香  
▲39歩 △27玉 ▲17金迄15手。

①87飛は77桂、同飛、67桂、同飛、57桂、同飛、47桂、26角、38玉、48金、39玉で59飛と引けず逃れ。

②87歩は同飛、77桂、同飛、67桂、同飛、57桂、26角、38玉、39歩、同玉、48角、38玉、39香、47玉、57飛迄2手長…だが、この場合の77桂と67桂は無駄合ではないかと思う。

理論上の最短手数、という話題には殆ど興味を持っていない。そんな作風でないのは他の作品を見てもらえば感じていただけるかと思う。そういう意味で本作はかなり異色。若島正氏も書いていたが4桂連合を避ける飛最遠打はおそらくは理論上この手数が最短となるはずである。(4金配置すればもう2手短くできるかも)

ただ、本作においても理論上の最短手数よりも詰将棋としての構成にこだわったつもり。遠打した飛を37まですべらせる快感を味わってほしい。久後生歩「15手にこの初手が入ったのが凄い。桂が5枚あれば詰まない

のに」

金子恒男「遠打の飛車打ちが凄いと思う。捌きも上々」

原田清実「なるほど、有効合も駒が足りなくなった時点で無駄合に変わる

というわけですね。久々に心踊らされる短編に出会えたという感じです」

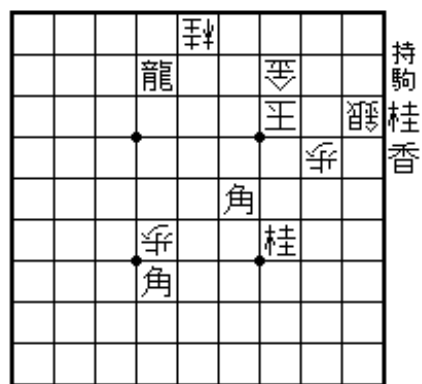
解説・吉田健「(前略) 表現されるのは遠打97飛のみ。四桂連合は紛れに

隠れてしまう。古い感覚かもしれないが、後続手順からも短編離れた構成のように思われる」

②の変化長手数については、半分以上はシロだと思っている。ただ発表前に再検討して余詰防止に必要、と配置した24とが実は不要で、それだけが心残り。

(詰将棋パラダイス H11・6)

第16番



- ▲23角成△同金 ▲35香 △34金 ▲25桂 △同歩
- ▲34香 △23玉 ▲12龍 △同玉 ▲33香成△21玉
- ▲12角成△同玉 ▲24桂 △同銀 ▲23金 △21玉
- ▲22金迄19手。

捌き主体の易しい小品。ペンネームで発表。

金子恒男「12龍の切り札の前の桂捨てがぴったり決まった」

加賀孝志「大駒全て捌けるのがよい。解後感最高！」

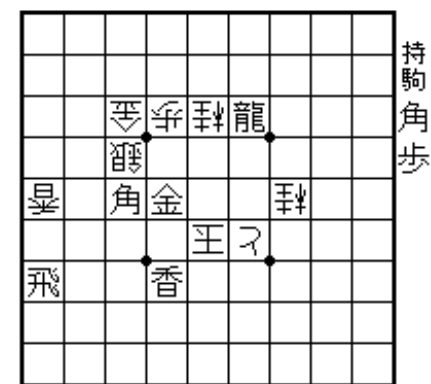
いのてつ「迫力満点なのに優しい、こういうの好きです」

原田清実「こういう風に作りたい。そんな作品」

舞台裏はというと、本当は第5番の序奏をこれでやりたかった、というところ。機構上どうしても無理だったのでたまたま見つけた別の収束で作品として独立させた。これはオイシイ。しかも初めて誤無解0を達成したある意味記念碑的作品。

(詰将棋パラダイス H13・11)

第17番



- ▲38角 △47と ▲同角 △同桂生 ▲55金 △同玉
- ▲56歩 △同玉 ▲57歩 △55玉 ▲64角 △同金
- ▲95飛 △65金 ▲同飛 △同銀 ▲54金 △同銀
- ▲56香迄19手。

第6番作成後、いざ全員が作品が出揃ってみたら自分の作品だけ都になっておらず、せっかくなら揃えたいな、ということで拵えたのが本作。しかし他のメンバーから「前の方がいい」と言われ、結局採用されなかった。自分にしては比較的キレイに纏まっているので、陽の目を見せてあげようとペンネームで発表。

秋元節三「しだいに軽やかに、しだいになごやかに」

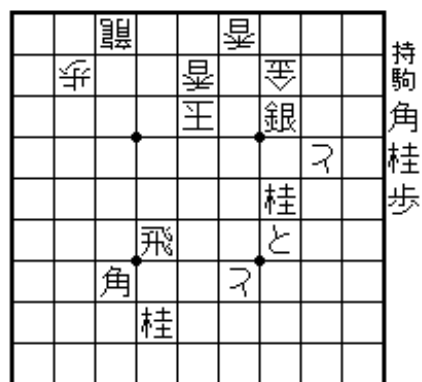
宮田卓也「易しいけれど、移動合・不成を巧みに入れているところに好感」

池田隆「1の字の曲詰。移動合2回の手順は解後感がなかなかよかった」

あぶり出しはこれを最後に作っていない。機会があったらまた作ってみたいと思う。

(詰将棋パラダイス H15・2)

第18番



- ▲45桂 △①54玉▲81角 △55玉 ▲63飛生△54玉
- ▲53桂成△同香 ▲66飛生△55玉 ▲45角成△同香
- ▲56歩 △54玉 ▲44銀成△同玉 ▲64飛迄17手。

①同香は42角、同金、同銀生、同玉、43桂成以下。

筋違いの角を利用して飛生を連続で行なう作品はそう目新しいものではない。手順全体を一本のストーリーとして見てもらえれば幸い。

久後生歩「角の遠打、飛不成2回、最後は両王手と詰棋の面白さ満載」

秋元節三「狙いの両王手実現にかくも長い闘い」

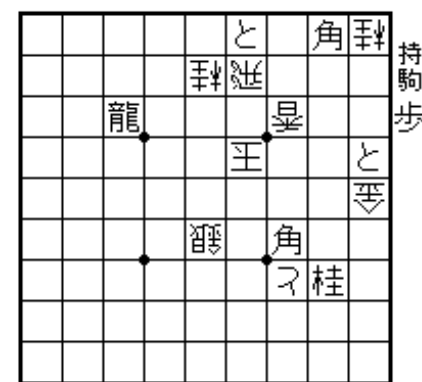
金子恒男「打った81角が打歩打開に大いに貢献してくれました。香の吊り上げにかなり苦勞させられる展開」

手順がかなりムシがいいので怪しいと思っていたら案の定今回の調査で余詰が判明。24と追加で修正した。

半期賞受賞作。

(詰将棋パラダイス H10・11)

第19番



- ▲53龍 △34玉 ▲64龍 △44桂 ▲同龍 △同玉
- ▲54角成△34玉 ▲25角 △同金 ▲26桂 △同金
- ▲35歩 △25玉 ▲15と迄15手。

私の作品は打歩詰絡みのものが多い、全体の約2割がなんらかの形で打歩詰を利用している。本作は角2枚の利きを利用した53龍捨てをスタートに創作したが、気が付いたら打歩打開作になっていた。これはほとんど打歩病と言っていい状態かも。ソッポ龍に対してソッポ桂で対抗するのは視覚的に面白いかと思う。打歩詰大賞佳作。

那須清「ゆるみなき好作です」

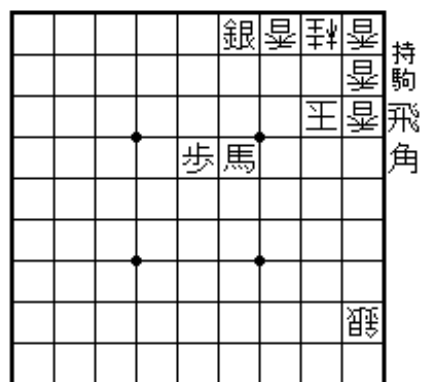
小林武雄「テンポが良い。手順もなかなかのもの」

仲西哲男「64龍に44桂跳あたり力強い。市島氏作か」

順位戦は作者名が伏せられるのがある意味魅力となっているが、自分の作品は色が濃すぎて、すぐ見破られているようだ。まあ無理ないか。ちなみにこの年は2位。3期連続だった。(笑)

(詰将棋パラダイス H13・6)

第20番



- ▲32角 △同香 ▲同銀生 △14玉 ▲16香 △15角合
- ▲同香 △同玉 ▲24角 △14玉 ▲13角成△同香
- ▲16香 △15角 ▲同香 △同玉 ▲24角 △14玉
- ▲13角成△同香 ▲16香 △15角 ▲同香 △同玉
- ▲24角 △14玉 ▲13角成△同桂 ▲16香 △15歩
- ▲23銀生△同玉 ▲22飛 △14玉 ▲15香 △同玉
- ▲33馬 △16玉 ▲17歩 △同玉 ▲44馬 △16玉
- ▲26馬迄43手。

実戦形からの香はがし趣向。山下雅博氏の名解説と感激の短評群を掲載しておく。

池田俊哉「何とも信じがたいところから始まる趣向。タイトロープのような手順は緊張感いっぱい」

☆趣向手順中の角合といえば「安い駒」という意味づけが多いが、本作は26への利きを造るという積極的意味付け。そしてその角をはっしと宙

に打つことで香ハガシが成立するとは驚きである。

福村努「『角→香→角→香』の持駒変換を簡素な配置と手順で実現！受賞級だと思う」

☆繰り返すことで味を出しているのではない。緊張感のある面白い手順を繰り返すことでより一層面白くしているのである。

☆そして序の設定に感心した。「23玉、31香、41銀」と配置することで初形のバランスをとり、更に手順中に32銀を発生させている。収束も含めて全体の雰囲気も良いし、秀作と言えるだろう。

由良祇毘「香のはがしがダイナミック。着地もピタリ」

那須清「趣向部分の意味づけが難しい。好作です」

栗山夏彦「これだけの駒数でこの趣向を発生させたのは驚異」

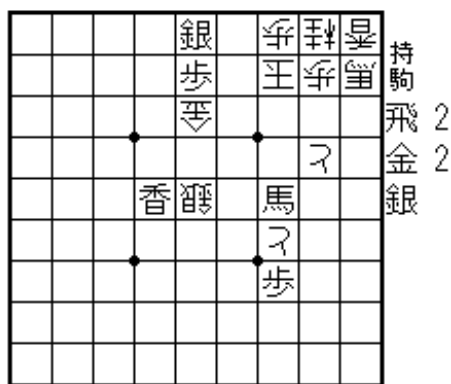
原田清実「この形から合駒を交えた軽趣向が飛び出すなんて。何を作っても器用なんですねえ」

ここまで褒められて嬉しくならない人はいないだろう。当時の私も天に舞い上がらんばかりであった。

素材自体はだいぶ前に偶然発見したもので、少し欲張っていた（どこを欲張っていたのかは秘密）のを諦めてみたら意外にうまく纏まった。特に21桂を配置したら自然に歩合限定にできるあたりは自分の不器用さから考えると奇跡的。そういう意味で代表作のひとつ。

（詰将棋パラダイス H10・12）

第21番



- ▲23金 △同玉 ▲14金 △同玉 ▲15銀 △同と
- ▲54飛 △34馬 ▲24飛 △13玉 ▲23飛成△同玉
- ▲34馬 △32玉 ▲42銀成△同玉 ▲53飛成△同玉
- ▲42角 △同玉 ▲43金 △41玉 ▲51歩成△同玉
- ▲52金迄25手。

実戦形が続いたがこちらはいかにも難解タイプ。力任せの序を経た後の54飛、34馬の応酬がテーマ。収束がなかなか纏まらず苦労した。逆に言うと、この収束だからこそこの序を付ける気になった、というところ。

なお金銀の捨て方はどうでも良さそうに見えるが初手23銀でも3手目14銀でも4手目33玉で逃れる仕組み。銀を残すことで33玉に32飛を用意するのが作者なりの精一杯の工夫。最初は普通に42銀打で詰むかと思ったが、32玉、33飛、同桂、同銀、同玉、45桂に同馬と取れるのをウツカリ。投稿前に指摘いただいた福島竜胆氏に感謝。

今川健一「宗看流の54飛、それに応える34馬は市島流。配置図はいささか苦しい古典的」

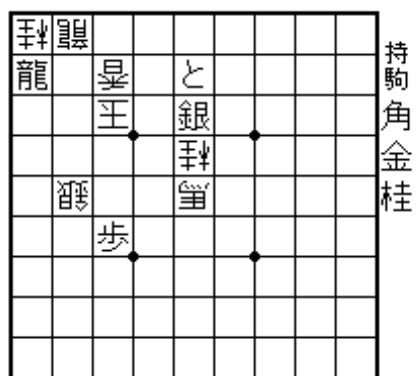
高橋耕之介「3枚の金銀全部を捨てる序といい、金頭の飛、対抗する馬の移動中合、収束はあっさりしますが、この作品には惚れ惚れしました。すばらしい」

三好晃司「金の頭に打つ飛車に対して馬の移動合で応える部分はみごたえ十分。さらにその馬が飛車で取れないのが面白い」

実はこの作品、少なくとも51銀から始めることは可能で（この形でもそのまま入るはず）、更に逆算することもできそうな気がする。当時は「これ以上難しくするのも…」ということで辞めたわけだが、主題と結びつくような手を入れる方向で作ってもよかったかもしれない。難解派になりきっていないことがわかっていただければ。はい。(笑)

(詰将棋パラダイス H13・5)

第22番



- ▲①65桂△同馬 ▲93龍 △②83歩▲③55角△同馬  
 ▲84金 △63玉 ▲83龍 △73馬 ▲74龍 △同馬  
 ▲64歩 △同馬 ▲62銀成迄15手。

- ①93龍は83桂合で逃れ。  
 ②83桂合は64角、同馬、84金以下。  
 ③84金は63玉、83龍、同馬として打歩詰で逃れ。

故柏川悦夫氏の名作のひとつに、「取歩駒を移動させておくことにより後でその駒を捨合して打歩詰を誘致することを回避する」狙いの作品がある。本作はそれのミニチュア版。捨合にこだわらず、単なる移動だけでも逃れることは可能、というワケ。(③参照)

野口賢治「いきなり93龍では桂合されるが馬をずらしておくことと歩合に変わる。再び元の形に戻って只今のシーンをVTRでどうぞと言いたくなる鮮やかさ」

仲西哲男「打歩詰回避の作でここ迄攻防にレベルが高く、難解な作は珍しい。市島氏作か」→また当てられてるし(笑)

金子恒男「最後まで粘りを見せる馬」

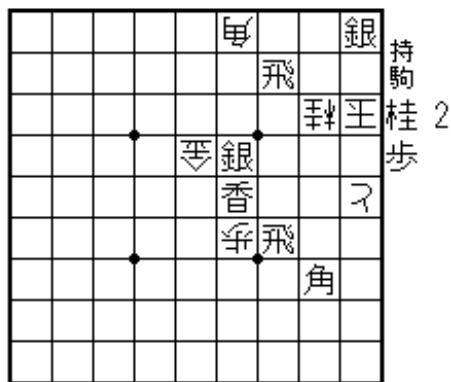
天六辰年「急がば廻れの見本」

83の合駒を限定するために序の65桂を都合よく入れることができ結果的には「合駒限定のための馬のスイッチバック」が表現でき、会心の一作。地味なのでどうかとは思ったがありがたい評価を頂戴してA級順位戦で久しぶりに優勝した。

創作にあたっては佐々木聡氏に色々貴重なアドバイスをいただいた。この場を借りて感謝申し上げる次第。

(詰将棋パラダイス H14・6)

第23番



- ▲22銀生△14玉 ▲34飛成△①24歩▲同龍 △同玉
- ▲16桂 △同と ▲33銀左生△14玉 ▲16飛 △15桂
- ▲36角 △②25金▲26桂 △23玉 ▲24歩 △12玉
- ▲15飛 △同金 ▲23歩成△同玉 ▲14角 △同金
- ▲35桂 △12玉 ▲13歩 △同金 ▲同銀 △同玉
- ▲14歩 △同角 ▲24金 △12玉 ▲22銀成△同玉
- ▲14桂 △21玉 ▲32角 △11玉 ▲22桂成△同玉
- ▲13金 △31玉 ▲41角成△21玉 ▲32馬 △同玉
- ▲23桂成△31玉 ▲22成桂迄51手。

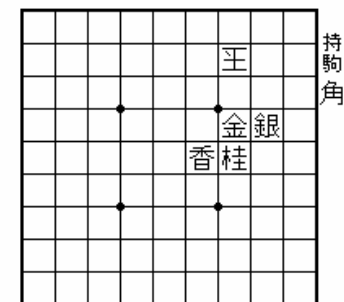
①24桂合は同龍以下作意の通りに進め、14角のところで35桂～24桂で読み。

②25飛合は26桂、23玉、24歩、同飛、同銀成、22玉、34桂以下。

足利太郎「11手目16飛の局面が原点と思う。さざ波のような寄せに作者の嗜好が窺える」

…という短評もいただいたが、残念ながらはずれ。この作品の原点は次ページの図の作品である。

新聞向けに作った9手詰で紛れが多くて初形も面白く、初手の23金にもそこそこ不利感があり、お気に入りだったがなぜかボツ。「これが選ばれないなんて」とか言いながらある会合で皆に見せて楽しんでいたらところ鬼才橋本哲氏に初手33金から本作の収束と同じよう



な順で詰められてガッカリ。恥ずかしながら32馬が全く見えてなかった。

非常に嬉しそうな橋本氏の表情を見て「よしそれなら、こっちの方を作品化してやる！」と逆算しまくったのが本作。素材が良かったのかほとんど苦労もなくスイスイと進んだ。できあがってみるとなんと51手。なんの狙いもないが個々の手の感触の良さはお気に入り。こういう長編があってもいいのでは、と思う。

市村道生「初形と手順は絶世の美人だが、序の数手を誤ると般若に豹変する。捌きの良い好作」

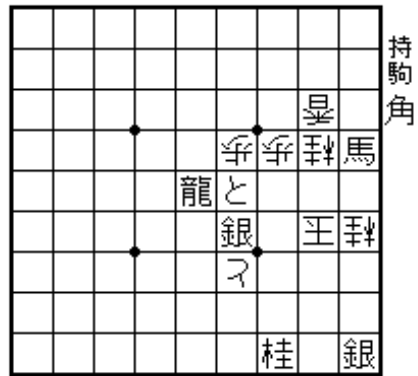
久後生歩「最初は桂合か歩合かで、次は飛合か金合かで迷う。そこを過ぎれば長手順のヨセが楽しめる」

その年の全国大会で多くの人から「難しい」と言われた記憶がある。確かに①②の変化は私が解答者だったらちょっと読みづらい。調子に乗って入れた序の数手が思いがけず紛れを生む形になった模様で少し反省。

(詰将棋パラダイス H10・7)



第24番



- ▲35銀 △同歩 ▲56龍 △①46と▲同龍 △36桂  
 ▲17角 △同玉 ▲47龍 △②37角▲18歩 △26玉  
 ▲36龍 △同歩 ▲38桂迄15手。

①46他合は同龍、同と、15角以下。36桂は17角以下作意順同様で早い。

②37桂は同龍～29桂。

打歩詰を利用した「古今最高のヤケクソ中合作品（非公認）」。(笑)

素材となるソッポ龍～吊るし桂は原田清美氏の作品から着想。逆算する過程で「もしかして…」と思ったらやはり46とが成立していた。打歩詰作品特有のソッポ龍が鍵となっている。56龍に対して46と、と引くこの感触！なんだこれは？という感じではないだろうか。他にも15角でなく17角でなければならなかったり、37角でなく36桂をパクついたり。詰将棋はこうありたい、と思う。

関末凱康「56龍、46龍、47龍、36龍と龍の動きが面白い」

岡島民雄「色んな場所に仕掛けがある。ドッキリ嵌った」

熊野古道「延命策のと金引き、合駒の角が退路封鎖役になってしまう等々、

構想だけでなく切れ味も充実の攻防」

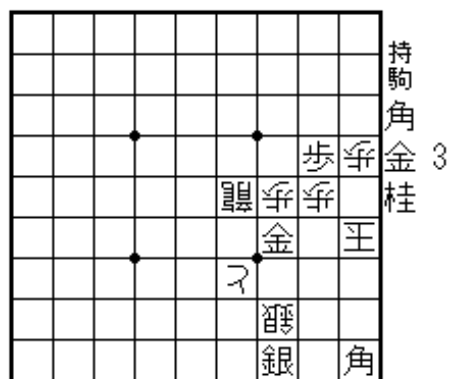
投稿時に「13手と15手の狭間に置いてください」と頼んだこともあり、誤解者は95名中35名。きっとその35名の方にはこの46との感触をより深く味わってもらえるものと。はい。(笑)

担当・阿部健治氏「中心は46とですが、初手37銀の紛れ、桂の移動合、ソッポの47龍、37角中合と随所に見所があり、その中に自然に溶け込んでいる所が素晴らしい。傑作です」

打歩詰にはまだまだ未開発の「不思議な手順」が埋もれていると思う。特に思考力の柔軟な若手作家にはオススメの分野である。

(詰将棋パラダイス H12・11)

第25番



- ▲26金打△同歩 ▲15金 △①27玉▲28銀 △36玉  
 ▲27銀 △同玉 ▲36角 △同玉 ▲48桂 △同と  
 ▲37金迄13手。

①同玉は25金打、16玉、26金、17玉、28角、18玉、19歩、29玉、18角で同手数駒余り。

角筋が遮断されているか、いないかの微妙な差を利用した邪魔駒消去もの。28銀や36角で28金だと36玉、48桂に46玉で逃れる。これだけの仕組みで28～27銀として36角と捨てる手順が成立している。

問題は序奏や収束をどうするか、という点にあり、当初は「金頭桂で終わるのもちょっとね」ということで収束側を少し工夫していたが、どうもしっくりこない。逆に序奏で工夫してみるか、ということで頭3手を入れた。若干駒数は増えたが、邪魔駒となる36金の顔を立て、①の変化で28角と使う手を入れることで主題を引き立たせる狙い。

手順の派手さ程には紛れも多くないので、ちょうどいいかな、と思って将棋世界に投稿したところ、憧れの谷川浩司氏に月間優秀作どころか年間

優秀作にも選んでもらった。「一般将棋ファンも多く見る将棋世界に載せるなら、形が綺麗だけどころか当たり前な手順が展開される作品より、若干形が悪くとも手順に夢がある作品を」という私なりの主張を認めていただいたようで、とても嬉しかった。

詰将棋を始めてからはや10余年、素材はとうの昔にスッカラカンだし、自分の才能の無さも否応なくわかってしまっている。それでも、これからもできれば一人でも多くの人をこの魅力的な世界に引き込めるような、そんな夢のある作品を作っていければ、と思っている。

(将棋世界 H13・9)